193.4

～シンガポール便り～

Vol.20

シンガポール広島事務所長
橋本　康男

新しいスタイルになった「ネットワークひろしま」でのシンガポール便りです。何事によらずこのような前向きの工夫・実行は，今の広島県に最も求められているものだと思います。

新しい入れ物にふさわしい内容になるよう努力しますので，引き続きご愛読くださるようお願いします。

■土佐維新■

３月末に(財)高知県政策総合研究所の一行６人が来星(→註参照)されました。

'91年12月に選出された橋本 大二郎知事の三大公約の一つとして'92年７月に県の100%出資で設立されたばかりのシンクタンクが，高知の今後のマスタープランづくりのためにシンガポールに学ぼうと，県・高知市の都市計画の実務レベルも含めたチームを派遣したものです。シンガポール政府機関の部長としてガーデンシティづくりに10年間も取り組んできている日本人のランドスケープアーキテクト（景観設計技術者）の方をお迎えして連日深夜まで熱心に議論するなど，地域を変えようという熱気にあふれた一行でした。

海外から見れば，東京・大阪以外は横一線であり，今後の地域の発展は，その地域の熱意と構想力，計画的具体的な取り組み，それに活力ある推進組織によるのではないかと感じた次第です。

■発展するベトナム■

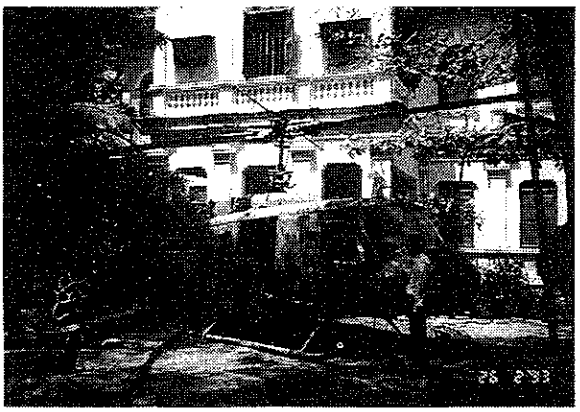
２月３月と計２回延べ２週間にわたってベトナムへ行ってきました。'76年に学校を卒業した世代としては，いささか感慨深いものがある訪問でした。'75年の南北統一以来，経済政策の失敗，国家丸抱え制に伴う競争原理の欠如による努力意欲の喪失などにより極めて厳しい状況に置かれていましたが，'86年からのドイモイ(刷新)政策の採用以来，急速に経済発展への道を歩み始めています。

＜ベトナムの街角＞

最初の訪問はシンガポールの日本商工会議所ミッションで，２度目は，広島県と広島商工会議所の共同ミッションでの訪問でしたが，どちらのミッションでもメンバーの印象に強く残ったのは，ベトナムの人々の勤勉さと向学心です。街には本屋が目につき，現地で働く日本人駐在員からの評価も極めて高いものでした。

道には日本製バイクと自転車があふれ，自動車は警笛を鳴らし続けてその間を縫って走っていきます。平和に見える現在でも戦争の傷跡は残っており，ホーチミン市にはアメリカ軍等の残虐行為を告発する戦争犯罪博物館があり，ハノイには北爆によって破壊された跡の残る鉄橋や爆弾によるクレーターがあります。南部でのゲリラ戦を戦った地下トンネルなども保存されており，戦争が遠い過去のものではないことを思い出させてくれます。

電気，輸送関係などのインフラストラクチャーの未整備，ホーチミン市を中心とする南部とハノイ市を中心とする北部との経済発展の格差，政治と市場経済体制との調和など多くの課題は抱えているものの，個人の創意努力が生かされる環境が生まれた今，勤勉で向学心の強い国民性からその将来には大きな可能性がありそうです。



＜ホーチミン市の戦争犯罪博物館にて＞

《シンガポール生活ひとくちメモ》
～家庭教師社会　シンガポール～

シンガポールの教育制度については以前も触れましたが，この国の特徴の一つは，小中高の生徒の約９割以上が家庭教師に付いているといわれることです。私自身もシンガポールに来て以来，週に一度英文レターの家庭教師の所に通っていますが，ここにも多くの地元の子供達が通っています。小学校の２年生から全学校において成績順のクラス分けがなされるような徹底した成績別の教育システムにおいては，豊かさに関係なくほとんどの親が，決して安くない家庭教師のための支出を惜しまないのも当然かも知れません。このような厳しい競争社会ですが，常に挽回のチャンスは与えられており，多民族の小国家が生き残るには明確な基準の下での健全な競争が必要ということで，国民の合意が得られているようです。

→註：シンガポールの首都・シンガポールは「星港」と表される。

193.5

～シンガポール便り～

Vol.21

シンガポール広島事務所長
橋本　康男

外国で暮らしていると，為替レートの動きが気になります。昨年は１Ｓ$80円で予算を組んでいたところそれよりも円安になった際に自動車の購入費等臨時経費として多額の送金を受けたために，当事務所にとっては大きな為替差損が生じてしまい，その後運営費で穴埋めするのに苦労しました。今年は幸いにして円高でスタートしており，事務所も私もにっこり…です。

■広島県国際経済交流協会■

去る４月１日に，広島県国際経済交流協会が設立されました。当事務所の運営母体であった広島県アジア経済交流協議会と広島県貿易協会などが統合され設立されたものです。新協会は，従来の県，各市，各商工会議所に加えて，町村，商工会，企業を新たに会員に加えた幅広いものであり，ロス事務所の運営も一体的に行うこととなります。

海外事務所の現場からすれば，業務量の半分以上を占め，しかも経済交流事業と明確に区分しがたい一般交流の整理をどうするのかという問題は残るものの，折角の総合的な経済交流組織の設立ですので，一層の交流促進に頑張っていきたいと思います。

■学生交流■

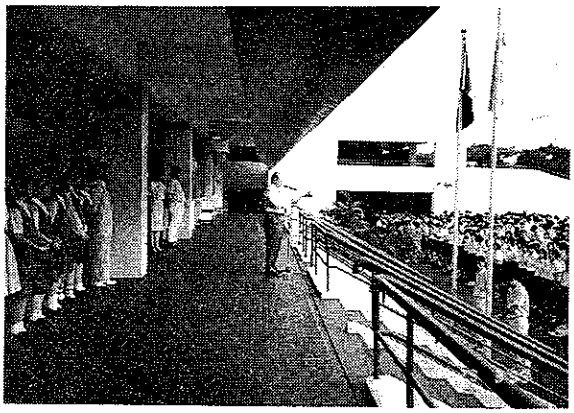
３月下旬には，学生の交流事業が２件続きました。

広島情報専門学校と国立シンガポールポリテクニック（ＳＰ）校との業務協力覚書の調印と広島の高校生が当地のラッフルズジュニアカレッジ（ＲＪＣ）校を訪問しての音楽・日本語交流です。

ＳＰ校は生徒数約１万６千人でシンガポール最大のポリテクニック校であり，大学が２校しかない当地ではその位置付けには大きいものがあります。広島県と同校との継続的な交流の経緯もあり，スムーズに話が進みました。今後，学生やスタッフの交流など多様な交流が期待されます。

＜ＳＰ校での業務協力覚書の調印式＞

高校生の交流は，昨年秋の広島県高校音楽祭に同校生徒のアンサンブルを招待しホームステイも経験してもらったことに続くもので，相互交流事業として極めて好意的な対応をしていただきました。同校はシンガポールで唯一日本語クラスを持っている学校であり，今回も広島からの高校生は日本語クラスの学生の家にホームステイさせてもらい，翌日は一緒に登校して朝会にも参加，音楽等の授業に参加したり，同校生徒と共にアフタヌーンコンサートを開いたり，日本語のクラスで生徒との意見交換会をしたりと盛り沢山の内容でした。



＜ＲＪＣ校の朝会－左端が広島の高校生＞

■新たな交流の時代■

このような若者の交流の中でめざしているものは，単なる儀礼訪問などの覗き見的体験的「国際交流」や一方的恩恵的な「国際協力」ではなく，交流を通じて双方にメリットがあり，お互いの対等な関係での理解を通じてより良い関係が生み出されるような継続的な交流です。同時に，こうした交流の中で，日本の中の地方同士の相対的な競争だけでなく，地方から世界に向かって胸を張って主張できるような地球レベルの地域づくりへの刺激も期待できると思います。

国際交流の基本は，無意味な優越感や劣等感を持つことなく肩肘はらずに対等に学び刺激し合い，地球社会の中で自らを見直すことだと思いますし，特に若い人たちの役割に期待したいと思います。このような幅広い交流を通じて，広島が得るものは大きいと思いますので，今後の交流の拡大を期待しています。

《シンガポール生活ひとくちメモ》

～年中真夏日，熱帯夜～

年中毎日が真夏日，熱帯夜，平均湿度85％というのは，経験してみなければ分からないハードなものです。季節感がないと悩む以前に，どうやって体力を維持するかの方が重大問題です。ある商社の方に言わせると，シンガポールでは日本の２倍歳をとるとのことですが，新陳代謝が常にハイな状態で，年中夜中に汗びっしょりで目が覚めるというのを想像してみてください。４月に１週間ほど日本に帰った際に，布団をかぶって寝れたのがとても幸せでした。

'93.6

～シンガポール便り～

Vol.22

シンガポール広島事務所長
橋本　康男

1年8ヵ月ぶりに日本に帰り，福岡空港から博多駅，広島駅と乗り継いで帰る途中，周りが全て日本人で日本語というのが随分と違和感がありました。すぐに感覚は戻りましたが，日本の社会と外国の社会との違いを感じました。

■多民族社会■

日本の社会の素晴らしさは，日本語の社会の中で，しっとりとした暖かさがあり，周囲の人たちへの緊張感なしに共同して目標に向かって努力していけることだと思います。

もっともこれは閉鎖社会が長く続いたことにもよるものであり，内輪社会のぬるま湯，馴れ合い構造を生み出す元ともなっていると思います。世界との付き合いの中で，生活様式，価値観，宗教の違う人々を理解しようとせず，自分の社会の感覚を多様な価値観の世界へ押し付けようとする，方向違いのことにつながりかねない危険があります。

当地に来て以来，色々な民族が一つの国，場所で暮らしていくことの難しさと，それが故に生まれてくる共存の知恵を感じます。声を出してあいさつするとか礼を言うとかは，最初のルールです。

これはまた，黙っていても分かったような気持ちになってもらえる社会と，自分を，自分の考えを言葉によって説明していかなければならない社会との違いでもあります。沈黙は金ではなく，相手に自分を認めてもらうためには，自分の考えを要領よく整理して魅力的に説明していくことが必要です。そこでは，周囲への気配りや協調性と同時に（これらはどこの社会でも必要とされるものです），明確な自己主張がなければ評価のしてもらいようがありません。

慣れてしまえば，理不尽なわがままや押付けが通用せず，結果主義，合理主義が多様な価値観の共存の知恵として採用されている社会の方が，さっぱりしていて良いと感じることもあります。

どちらの社会がいいとは言えませんし，それぞれに良さがあると思います。恐いのは，どちらかが一方的に良いと主張することであり，扉を閉ざしてしまうことになります。現代の社会は海外の社会と切り離しては生きていけませんし，世界の中でその常識やルールに従ってメンバーの一員として認めてもらうことが必要です。そのためには相互の交流を通じて刺激を受け見直しをしていくことが必要だと思います。

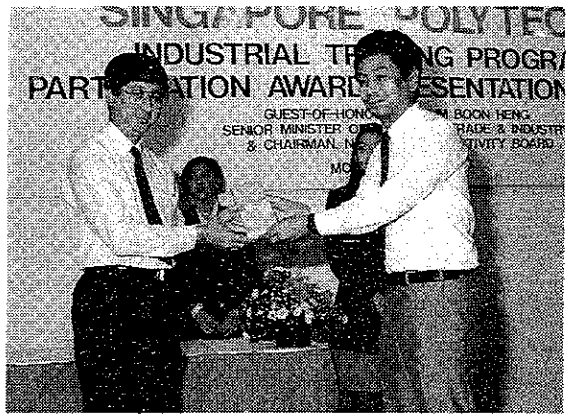
これからは，好むと好まざるとにかかわらず世界の中での評価を避けることのできない時代であり，自分の社会の中だけで通用する理屈，常識に頼ったり，新しい取り組みに対して問題点やできない理由，しない言い訳を並べるのではなく，世界の常識に通用するかどうかを考えていく必要があると感じています。

■学生海外企業研修■

先月末，国立シンガポールポリテクニック校において，リムブーンヘン通商担当上級国務相を迎えて同校の学生企業研修への協力企業の表彰式がありました。

シンガポールでは，ポリテクニック校在学中の学生を1～2ヵ月間，企業へ研修に派遣することが重視されています。昨年からは海外の企業への派遣も開始され，第一回の海外研修に協力した日本の㈱日本メディカルサプライと中国塗料㈱の2社と当事務所も，上級国務相から同校の記念品の授与を受けました。

このように，当地では実践的な教育への熱意が極めて高く，政府としても積極的に支援しています。



<リムブーンヘン通産担当上級国務相からの記念品授与>

《シンガポールひとくちメモ》

～わがまま，侮りがもたらすもの～

本年2月に当地のホテルのバー（日本風のでなく西洋風の）で，2人の日本人（49歳と59歳）がウエイトレスのお尻を触って逮捕され，罰金千ドル（当時約8万円）を課されて国外追放になった事件があったばかりなのに，また日本人がシンガポール航空の機内でスチュワーデスのお尻を触って逮捕されました。

これを厳しすぎると見るかどうかは社会風土の違いとしか言いようがないような気がしますが，どちらの場合も相手の抗議を無視して繰り返したということですし，酔っ払いに対して特別に甘い日本の社会ではともかく，外の世界では許されないことです。自分のムラから外に出ても甘えが通用すると思うのはそれこそ甘えた話であり，思い上がり，蔑視を指摘されても仕方がありません。

Two touched woman's buttocks

■TWO Japanese tourists were each fined $1,000 yesterday for touching the buttocks of a woman at the Compass Rose lounge at the Westin Stamford Hotel.

After drinking a bottle of beer on Saturday, XXXXXXXXXX XXXX, 49, and XXXXXX XXXXXXX, 59, touched the woman's buttocks.

When one of them touched her buttocks again despite her protest, she told her supervisor about it.

Both men were detained by security guards as they were about to leave the hotel. The police were called.

<日本人客逮捕の新聞記事>

193.7

～シンガポール便り～

Vol.23

シンガポール広島事務所長
橋本　康男

シンガポールに来て丸２年が経とうとしています。

２年前に当地に来た際には，ビザの申請や電話，学校などの手続き，事務所備品等の調達，挨拶回りなどに，慣れない土地で一人で走り回りながら，海外における県単位の事務所というのは一体何をすればよいのか，明確なイメージがつかめずに悩んでいました。

その後当地の人々の暖かい協力のおかげで事務所活動も軌道に乗ってきて，やっと本格的な出発点に立ったと感じられる所まで来ましたが，もう任期の終わりが目の前に見えだしており，困惑しています。

■海外における地方事務所の役割■

海外事務所は，海外における県の窓口であると同時に，県自身にとっての海外への窓口でもあり，海外との交流を進めていく拠点です。

これまでの活動を通して，国際交流を通して地域が得るものは大きく，事務所の果たせる役割も大きいとの感を強くしています。交流を通してお互いの考え方，やり方の違いを知り，自分の社会を見直すことは，地球時代における地域づくりに大切なことだと思います。例えば県庁自身も，中にいればその存在は大きく感じられても外からみれば社会の一つの構成員に過ぎず，それを考えれば，冗長な協議で時期を失したり，内部でしか通用しない常識に依拠することなく，社会の変化に即応した対応ができるのではと思います。

地域の独自事務所ならではのメリットは，経済交流面では，地元の企業や経済団体等との継続的な接触による交流機会の開拓と，現場感覚を活かした情報収集・提供，相談対応を，県内企業を対象として提供できることかと思います。一般交流面では，継続的な交流事業のアレンジの外，現地の事情や経験を踏まえての助言，意見交換が大切だと考えています。

経済・一般とも交流事業においては，積み重ねによる経験と，相手との継続的な協議に基づく信頼関係とが大切になってきます。交流を一過性の訪問事業に終わらせないためには，こちらの考えを相手によく説明し理解を得た上で，双方にメリットのある交流事業として企画していく必要があり，実績を積んでいくことによって広島の信用を築いていくことが必要です。

■よろず相談所■

事務所を開設して２年も経つと，地元の人たちからも色々な相談が持ち込まれるようになります。

曰く，部品製造から組立分野へ進出したいのだが適当なパートナーがいないだろうか，日本の企業に FAX で発注書を送ったが返事がなく催促しても音さたがなく困っている，新型のエンジン改良技術がオーストラリアで発明されたが関心のある企業はいないか，日本の企業に勤めたいのだがどうすれば良いか，日本企業への就職は外国人にとって不利と聞いているが本当か，インドネシアに建設中の工業団地に日本の中小企業を誘致したいのだが，２年後に大規模な国際見本市を計画しているのだが，青少年のオーケストラを率いて日本へ行くのだが楽器の通関にカルネという書類が必要かどうか分からない，アジア競技大会のチケットを取り扱いたいのだが，日本語教師の継続的確保について，など幅広い分野の話が舞込みます。中には広島県とは関わりのない話もあるのですが，他に相談するところがないからなどと頼られると，つい引き受けてしまいます。

＜６月に開催された東南アジア競技大会，サッカー＞

《シンガポールひとくちメモ》～豪華絢爛の結婚式～

先日，シンガポーリアンの結婚式に家族で招待されました。新郎は空軍に勤める32歳のエンジニアで，新婦はコンピューター会社に勤めていて27歳です。シンガポールでは晩婚化の傾向が顕著で，結婚しない女性の増加が社会問題となっています。

シンガポールの結婚式は招待状記載時刻よりもはるかに遅れて始まると聞いていたので，定刻より30分遅れで行ったのですが，それでも開始まで20～30分待たされました。結局夜の８時半に始まり，終了したのが11時過ぎ。当地では披露宴にはお金をかけるとのことで，ヒルトンホテルに500人以上を招待しての大宴会であり，唯一の日本人家族の私たちは，シンガポーリアンのパワーと豊かさに圧倒されました。ちなみに，新婚旅行はヨーロッパへ３週間です。

＜シンガポールの結婚披露宴＞

'93.8

～シンガポール便り～

Vol.24

シンガポール広島事務所長
橋本　康男

去る８月12日に事務所開設２周年を迎えました。

季節のないシンガポールでは，時の過ぎるのを感じる機会が乏しく，あっという間に過ぎた感じです。

事務所の実績と信用が蓄積されていくに従って，仕事の幅が広がり内容も面白くなってきており，あと数年は当地での仕事を楽しみたいと思っています。

■２年間を振り返って■

この２年間の日本からの来客は，延べ78件，808人。訪問先等の斡旋件数165件，面会等の活動件数866件となっており，東南アジアの自治体関係の事務所としては，最も多忙な事務所の一つだと思います。

当事務所の特徴は，各種の交流事業を数多く手掛けていることで，特に最近は，地元の大学，高専，高校や地元企業などとの交流事業に力を入れています。これらの交流も，単なる訪問ではなく，事前に手紙の交換などの準備をした上で，ｸﾞﾙｰﾌﾟﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝをするなど，より掘り下げた交流となるよう努めています。

OVERSEAS INDUSTRIAL TRAINING IN
HIROSHIMA, JAPAN

From left: Tey Poh Lee, Oh Hui Ting, Tay Suan Hee, Tan Khai Wee and Billy Chan, Manager of Department of Industry Services, Industry Services Centre

Four students spent about four weeks in Hiroshima, Japan undergoing their Industrial Training. This is the third batch of students who were sent overseas for their ITP.

A group of six students went to Germany in May and June 1992 and two students went to France during the same period.

This is the first time that Singapore Polytechnic is sending students to Hiroshima for ITP. The four students are :

Mr Tan Khai Wee (9128873) DCP 2A
Miss Tay Suan Hee (9129113) DCP 2A
Miss Oh Hui Ting (9130830) DCP 2D
Mr Tey Poh Lee (9110469) DME 2B

Tan Khai Wee and Tey Poh Lee were attached to Japan Medical Supply Pte Ltd and Tay Suan Hee and Oh Hui Ting were attached to Chugoku Marine Paints Pte Ltd. Both companies have their Headquarters in Hiroshima and have subsidiaries in Singapore.

Before the students left for Japan, they underwent a one-week course on the Japanese Language and Culture conducted by Miss Kumika Tanaka, a lecturer with the Language & Communication Department. All four students are already studying the Japanese Language conducted by the Foreign Language Centre of the Polytechnic for the last one year.

The students left Singapore on 24 November 1992 and returned home on 22 December 1992. As part of their itinerary, they paid a courtesy call on the Governor of Hiroshima Prefecture. The Prefecture Government officials briefed them on the history and development of Hiroshima and arranged a tour of the area.

They then spent the rest of the time attached to their respective companies for Industrial Training.

The Industrial Training in Hiroshima is made possible with the untiring efforts of the Director of the Hiroshima Representative Office in Singapore, Mr Yasuo Hashimoto, the support of the two Japanese companies and the generosity and goodwill of the Hiroshima Prefecture Government.

<学生企業研修についての校内誌>

■変化の時代■

最近，日本の新聞の購読を始めました。当地では，朝日新聞と日経新聞とが衛星通信を使って同時印刷を行っており，日本と同じ朝刊が毎朝読めます。以前も一時購読していたのですが，日本の新聞があるとついそちらに目が行ってしまい，ただでさえ忙しくて目が行きにくい地元紙を読む時間がなくなるので中止していました。

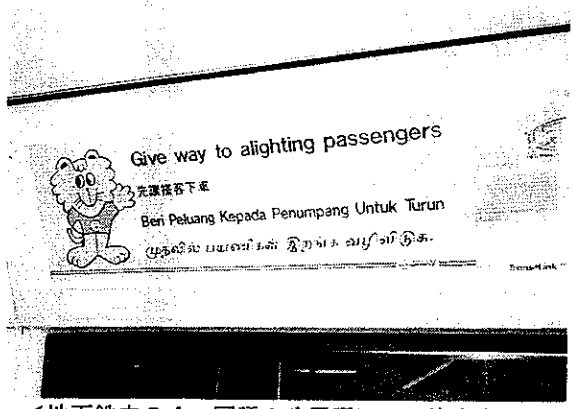
ところが，７月からの日本の政治の変化は，海外から見ていても大変興味深く，やっぱり日本の新聞から情報をということで購読を再開した次第です。ほかの情報がほとんどない状況で新聞だけを読んでいると，文字どおりよその国の話という感じで実感が湧きませんが，逆に新鮮に楽しめます。いずれにしても，現代が変化の時代であると感じます。今日が昨日と同じだったからといって，明日も今日と同じであるとは限らず，幾多の選択肢の中から明日を選んでいっているのだということを，改めて思い出させられます。

■言葉について■

シンガポールは，中国系78%，マレー系14%，インド系７%という多民族国家です。国語はマレー語，公用語は英語，中国語，マレー語，タミール語の４言語となっていますが，教育，行政は全て英語であり，英語が共通言語として使われています。家庭ではそれぞれの民族語を話しながら，社会では英語でコミュニケーションをするというのは，多民族国家ならではの必要性によるものですが，壮大な社会実験だと思います。

この国では，外国語とは言わず，第一言語が英語，第二言語が各民族語とされています。ちなみに第三言語は，日・仏・独語です。中国系の場合，家庭では，福建，潮州，広東という各出身地の言葉を使うことが多いのですが，これらは標準中国語として採用されている北京語とは全く異なるために，出身地の言葉，北京語，英語の３言語を話すというのが一般的です。中国系同士でも英語で話をしたり，出身地の言葉や北京語で話をしたりとまちまちです。当事務所のアシスタントさんは，私とは英語ですが，友人との会話は，英語と中国語のチャンポンで話しています。

学校の授業が英語であるためほとんどの人が英語を話しますが，多民族が共通語として使っているという状況から，シンガポールの英語はやや特殊です。つまり，より簡単に単純にということで，時制に厳しくないなど相当簡略化されており，日本人にとってはなじみやすい英語だといえそうです。



<地下鉄内の４ヵ国語の公用語による注意表示>

《シンガポールひとくちメモ》　～カラオケ～

東南アジアでもっとも普及している日本語は，「カラオケ」ではないかと感じます。どこにいっても，「KARAOKE，卡拉ＯＫ」の文字が見られます。インドネシアのスマトラ島の地方都市に行った際にもちゃんとあり，驚きました。このような所では客層を反映して，英語と中国語の歌しかないことも多いようです。

シンガポールでも好きな人は多く，先日も地元の企業経営者の方との付き合いで，午後７時から午前１時までカラオケルームという経験もしました。私はもっぱら聞き役なのですが，中国語で歌われる日本の歌というのも風情があり，英語と中国語の歌の洪水の中で，楽しみました。

193.9

～シンガポール便り～

Vol.25

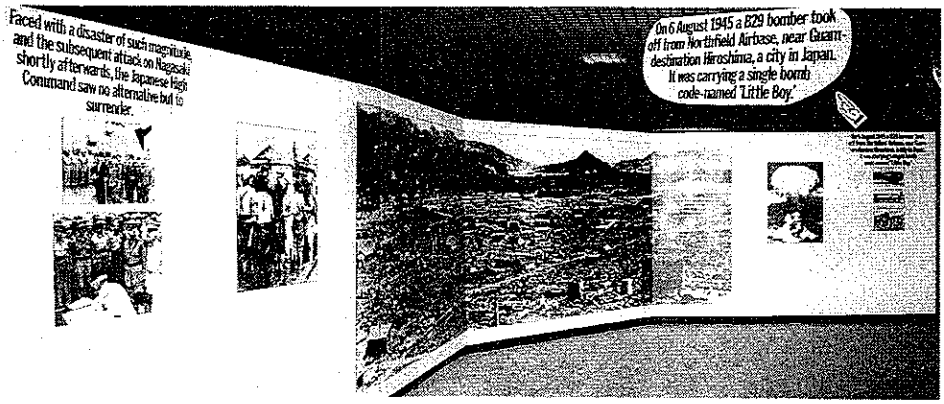
シンガポール広島事務所長
橋本　康男

先日，マレー半島往復1,300kmのドライブ旅行に家族で行ってきました。南北に高速道路の建設が進み，地方に至るまでダイナミックに経済的発展が進んでいるマレーシアを実感しました。

51年前に広島の第５師団などの日本軍が侵攻し戦った道ですが，平和を実感しながら楽しんできました。

■シンガポールにおけるヒロシマ■

シンガポールに来て驚いたことの一つは，ヒロシマの原爆の扱われ方です。国立博物館でシンガポールの歴史のビデオを見た際，日本軍による占領時期の虐殺事件や厳しい生活の紹介の後で，突然大きな効果音とともに原子爆弾のきのこ雲が映し出され，「かくして戦争は突然に悲惨な終末を迎えた。」との説明があり，ショックを受けました。原爆が，戦争の悲惨さの象徴としてとともに，長くつらかった戦争・占領の終結の象徴としても扱われています。観光地セントーサ島の歴史ろう人形館でも，占領時期の展示の後に，一部屋全部を使ってヒロシマの原爆の展示がしてあります。



<セントーサ島の歴史ろう人形館の原爆展示>

当地では，占領後１週間目から始まった日本軍の「検証」により，日本側の証言でも約６千人もの人々が殺されたといわれています。独立の立役者であり30年間にわたってこの国をリードしてきたリークアンユー元首相も，青年時代にこの日本軍の虐殺から危うく逃げのびた経験が，自国の運命を自国で決められるようにと独立への情熱をかりたてたと述べています。

痛みは，受けた側では忘れられません。また，外国人との相互理解が不得手で日本人以外を人と見ないような日本軍のやり方に，恐怖感があったようです。言葉・宗教・文化・外見の違う相手との交流には，相互の相違を受け入れ，同じ感情を持つ人間としての仲間意識を持つことについての習熟が必要なようです。

この点で，ヒロシマは被害者としてだけではなく，戦争の悲惨さを知り，それを再び引き起こさないための相互理解の必要性を理解する者としてのアピールが必要であると思います。当地では，日本への期待やあこがれが大きい反面，不幸な歴史からの不安感も残っており，このようなヒロシマのアピールは，両者の新しい関係を生み出していくと思います。戦争責任の問題についても，過去の事実の認識と反省の下に，相互理解の促進と人的な交流の拡大という点で取り上げられるべきだと感じています。

シンガポールの中心地には，日本軍占領時期の犠牲者慰霊碑が建てられています。先日地元の企業経営者から，この慰霊碑建立の際，その中止について日本から働き掛けがあったなどの話も聞き，日本への安心感ある信頼の獲得の難しさを感じました。

交流とは相互に学ぶことであり，そのためには，お茶やお花といった伝統文化だけではなく，現代の産業社会に働く人々の幅広い相互理解が中心になるべきだと思います。このような相互理解は，お互いの心の豊かさを生み出すと思いますし，ヒロシマはその原点たりうると感じています。幸いこのような視点での当事務所の交流事業は，地元の人たちからの理解と協力を得て，順次拡大をしていきつつあります。

《シンガポールひとくちメモ》　～陸路の国境越え～

シンガポールの中心街から高速道路を30分も走ると，隣国マレーシアとの国境に出ます。幅１kmほどの海峡が国境で，コーズウェーと呼ばれる土手道でジョホールバール（ＪＢ）と結ばれています。

車でマレーシアに入る場合は，まずシンガポール側において，高速道路の料金所のような検査所で車に乗ったままパスポート検査を受け，次にガソリンが４分の３以上入っているかチェックされます（マレーシアの方が物価が安いための規制）。コーズウェーを渡った後で今度は同様にマレーシア側のパスポート検査を受け，税関でトランクを開けて見せて終了。この間の所要時間ほんの数分で，あっけない国境越えです。

１日に何万人もの人々が国境を行き来し，ＪＢに住む日本人小中学生は，毎日この国境を越えてシンガポールの日本人学校に通学しています。

<マレーシアへ行く車のガソリン量規制標識>

～シンガポール便り～

Vol.26

シンガポール広島事務所長
橋本　康男

ついに新空港が開港します。昭和55年度から57年度までの３年間空港対策を担当し，便利だが騒音問題や地形的制約から発展可能性に限界のある現空港と，少し不便だが将来の航空輸送ネットワークのハブとなりうる新空港のどちらを選ぶのかと議論していた頃を懐かしく思い出すとともに，今から10年後の新空港の評価が気になります。昭和55年度に広島空港基本調査が始まった時には，企画部交通対策課の中に空港担当が２名だけという状況でした。以来13年。時の流れの速さを感じるとともに，行政の仕事の息の長さ，将来を見つめる目の大切さを感じます。

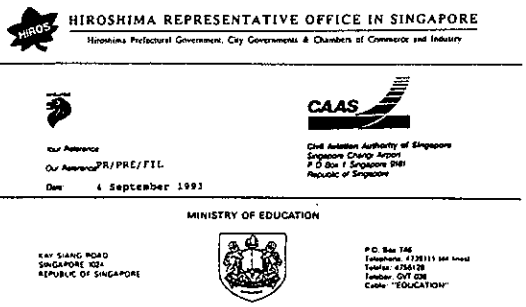
■レター社会シンガポール■

当地は西洋風のレター社会です。なんでも電話で済む社会と異なり，ことごとくレターが要求されます。

当事務所でも，電話での打合せ後の確認レター，ミッションの受入依頼レター，礼状，事業説明のレターなどなど常にレターを書いています。

レターは，個人をベースとして書かれるため，本人のサインがなければ出せません。この点が，あるレベルまでの内部決裁があれば，知事名ででも文書が出せる組織との違いだと感じます。サインすることにより，個人の責任が明確となり記録に残ります。代理として出す場合には，自分の名前とサインのほかに，代理としての職名を書くか誰のために書いているかを明記します。差出人本人のサインが必要であるために，権限委譲を進めて自分のサインでレターが出せる人を増やさないと，仕事が進まなくなるという面もあるようです。

レターシステムの中で私が特に気に入っているのは，CC (Carbon Copy)というシステムです。レターを発送する際にその写しをレターの最後にCC:Mr.○○として表示した人にも同時に送付することであり，これによって，第三者もレターの内容を知ることができ，情報を共有し，状況を把握することができます。なお，これには写しを送付することによって，自分が相手との打ち合わせ内容に基づいて間違いなく次の行動を起こしていることを示す効果もあります。


HIROSHIMA REPRESENTATIVE OFFICE IN SINGAPORE
Hiroshima Prefectural Government, City Governments & Chambers of Commerce and Industry
CAAS
Our Reference PR/PRE/FIL
Date 4 September 1993
MINISTRY OF EDUCATION

＜個性で売り込むレターヘッド＞

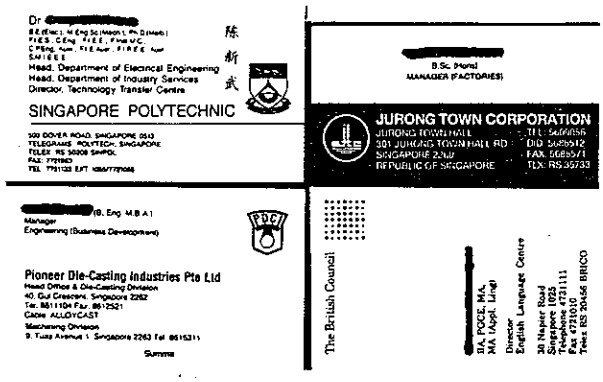
■エクセレントリーダーとエクセレントスタッフ■

当地に来て感じるのは，企業の社長や部長クラスはもちろん，政府機関の部長，学校長，学部長といった各部門の長の権限が大きく，その個性が大きく反映されることです。もちろんそれは，厳しく実績と責任が問われることの裏返しでもあります。前述のレター社会でもみられるように，個人が前面に押し出される社会だということでしょう。

この国の教育制度も優秀なリーダーを育てようというシステムになっています。それはある面ではエリート教育であり，学歴社会として表れてしまいます。もちろん学校の秀才が優秀なリーダーになるとは限らないというのは，洋の東西を問わず真実のようですが，限られた資源しかない小国が世界に伍して生き抜いていくためには優秀なリーダーの養成が必要だというこの国の信念には，断固としたものがあります。

組織の無名性の庇護の下に無為無責任が許容されるということなく，個人の信用，企画力行動力が直接問われ，自己表現能力判断能力が重要となってきます。学歴・資格主義の行き過ぎなどの弊害もありますが，実績チェックも厳しく，ポストに安住するという訳にはいかないようです。また，実力主義の一環として，若手と女性の幹部登用がはるかに進んでいます。

社会全体の印象を一口で言えば，エクセレントリーダーのシンガポールとエクセレントスタッフの日本という感じです。


Dr [redacted]
Head, Department of Electrical Engineering
Head, Department of Industry Services
Director, Technology Transfer Centre
SINGAPORE POLYTECHNIC
[redacted]
MANAGER (FACTORIES)
JURONG TOWN CORPORATION
REPUBLIC OF SINGAPORE
[redacted]
Manager
Engineering (Business Development)
Pioneer Die-Casting Industries Pte Ltd
The British Council
Director
English Language Centre

＜自分の学位を刷り込んである名刺＞

《シンガポールひとくちメモ》　～スポーツ～

シンガポールで人気のある３大スポーツは，ジョギング，水泳，サッカーとのことです。夜遅くでも女性が一人でジョギングをしていますし，年中夏のため年中屋外プールで泳げます。このほか，テニス，スカッシュ，バドミントンなども盛んで，公営・民営のスポーツ施設が整備されています。

最近は地元の人のゴルフ人口も急拡大しており，広島市よりも狭い国土に 300万人が住んでいるというのに，国内にゴルフ場が11ヵ所もあります。

もっとも，熱帯ゆえの暑さは強烈で，我が家の近くのプールでは，昼間泳いでいるのは西洋系と日本人で，地元の中国系の人は夕方から来ているようです。

～シンガポール便り～

Vol.27

シンガポール広島事務所長
橋本　康男

事務所開設以来の日本からの研修・視察団の来客累計が，２年３ヵ月で 1,000人を超えました。97団体で訪問等斡旋件数は 217件。シンガポールから広島へも17団体，91人の訪問をアレンジしています。

11月の広島への訪問も，シンガポール大学日本研究学科の学生20人が２週間ホームステイをして広島大学の日本語教師養成課程の学生との交流や企業訪問で社員と意見交換，シンガポールポリテクニック校の学生10人が広島情報専門学校の協力で６週間にわたって広島に滞在し４週間は広島企業で研修，シンガポールの中小企業を中心とした視察団が広島テクノプラザ等で電磁波障害防止技術を研修，など幅広いものです。

事務所開設以来，地元の人々の協力のおかげで，ネットワークも広がり，事務所の信用も高まってきており，これまでの蓄積を基に，今後より多様な交流が，双方向で生み出されることを期待しています。

■シンガポール観光案内■

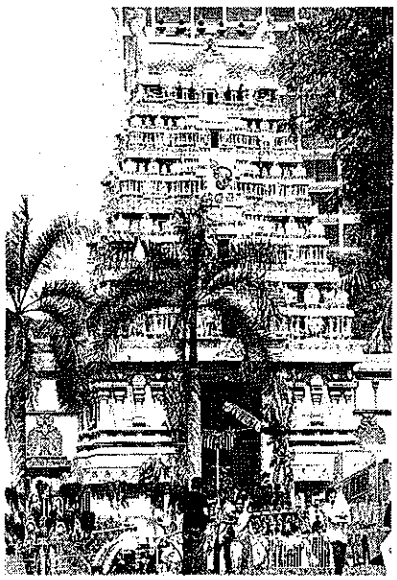
直行便の就航で，シンガポールが随分身近に感じられるようになったのではないかと思います。今回は，シンガポール観光の一端を御紹介します。ガイドブック等に豊富な情報がありますので今更とは思いますが，ご参考になれば幸いです。

●多民族社会と熱帯

シンガポールの特徴は，多民族社会と熱帯です。

中国系78%，マレー系14%，インド系７%というこの国では，政府の住宅政策による混住が進んではいるものの，リトルインディア，アラブ人街，チャイナタウンといった民族色の強い地域も残っています。

また，仏教，道教，イスラム教，ヒンズー教，キリスト教など，各宗教の多様な寺院も見所です。



＜ヒンズー教の寺院＞

熱帯という点では，動物園とバードパークがお薦めです。動物園というと，日本ではライオンが寒さに震えて狭いおりの中でしょんぼりしているという感じがあるかも知れませんが，ここ熱帯の動物園では，おりや柵を意識させないオープンスタイルの広々とした園内に熱帯の動物たちがのびのびと暮らしています。象に乗ったり，オランウータンと肩を組んで写真を撮ったりと，参加型のイベントが多いのも特徴です。

バードパークも同様で，色とりどりの熱帯の鳥たちが集まっており，鳥と一緒に記念撮影をしたり，めずらしいバードショーを見たりと，随分楽しめます。

＜バードパークでの鳥と一緒の記念撮影＞

●往復３時間の海外旅行

今年９月号でも書いたように，隣国のマレーシアのジョホールバールへは，３時間あれば観光して往復してこれます。片道30分のドライブで隣国へ行けるというのはおもしろい経験だと思いますし，街並の違いを楽しんでいただけると思います。

●シンガポール周辺のビーチリゾート

シンガポールから小型機で40分飛ぶとマレーシアのティマオン島に着きます。映画「南太平洋」のロケ地として知られた島で，シュノーケリングで色とりどりの珊瑚と熱帯魚が楽しめます。この他，タイのプーケット島，東マレーシアのコタキナバルなどのビーチリゾートへ足を伸ばすことも考えられます。

●日本語ツアー

全て組み込んであるパックツアーを選ぶのも一つの方法ですし，当地でも日本語ツアーを申し込むことができます。年間 100万人もの日本人が訪れるシンガポールでは，日本語の観光バスも数社あります。

《シンガポール生活一口メモ》　～結婚写真の撮影～

当地では，新婚カップルがリボンとテープで車を飾り，ウェディングドレス姿で観光名所などで記念写真を撮って回っている姿をよく見かけます。

スタジオで撮影する場合もあるそうですが，いずれの場合も多い人は数十枚も撮っています。

＜マレーの民族衣装による結婚記念写真の撮影＞

～シンガポール便り～

Vol.28

シンガポール広島事務所長
橋本　康男

シンガポールで３度目のお正月を迎えようとしています。地元の人たちの声に支えられての任期延長の意見書提出にもかかわらず，これが当地最後の正月になりそうです。ゼロから懸命に積み上げてきた実績と信用がようやく蓄積されてきて，仕事の幅が広がってきているだけに，いささか残念な気もしますし，地元の人たちからなぜ今の時期に帰るのかとも聞かれます。

振り返れば，本当に地元の人たちに助けられての活動でしたし，元気づけられて，やってこれました。

■東西南北の交差点シンガポール■

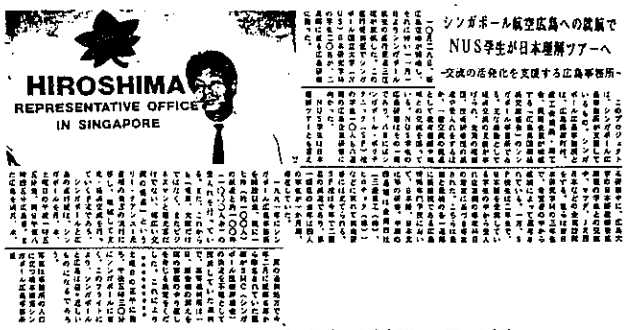
当地に来るまでは，東南アジアというのは日本の南の海の果てにあるという程度のイメージしかありませんでしたが，こちらに来てみると，まさに世界の東西南北の交差点に位置していると感じます。

地元の企業の人などと話をしていても，スイスの企業と共同で技術開発をしている，オーストラリアからバイヤーが来る，カナダに留学していた，ベトナム・中国に投資しているなどなど，幅が広く，また，西洋と東洋との接点でもあります。

社会の考え方などは，むしろ西洋文化に属しているようです。実力主義と学歴主義が混在しており，自分のキャリアアップのためには，転職を厭いません。実績が厳しく問われ，驚くような若い幹部が組織を動かしています。経験をベースとし調和を重視する組織から来た者には，あまりにドライに映りますが，責任がはっきりしており，各自が頑張って努力している姿は共感できます。また，多民族国家であり英語を共通のコミュニケーションの道具として利用していることから，言葉尻にこだわることなく，主張の中身やその論理性が重視されるというのも，楽しい経験です。

Jalan Orang 2
シンガポール発

＜朝日新聞東南アジア版＞


HIROSHIMA
REPRESENTATIVE OFFICE
IN SINGAPORE

シンガポール航空広島への就航で
NUS学生が日本運輸ツアーへ
-交流の活発化を支援する広島事務所-

＜シンガポールの日本人向け新聞，星日報＞

■閉鎖組織？の日本■

当地で，なぜ日本人はあんなに一生懸命働くのかと聞かれることがあります。

そのような時には，日本人が閉鎖組織で働いているのが一つの理由と答えています。つまり，一旦組織に入ると，その組織の居心地が良くても悪くても通常は転職が考えられず一生そこで過ごすので，居心地を良くするために周囲の人々との人間関係を重視し，組織の発展と自分の発展とを同一視せざるを得ない。もっと自分を評価してくれる職場を外に探すのではなく，自分が属している組織の中での発展をめざすために，力が内に蓄えられ，継続的な努力を生み出し，時としてそれが大きな力になっていく。こう説明すると，半分納得しながらも，なぜもっと自分の力を活かし可能性を伸ばすための場を探さないのかとも聞かれます。

協調性や長い目で見た評価・人材育成も大切ですし，「今」について常に厳しい評価がされるが故の緊張感もあり，どちらが良いとは言い難いようです。

Straits Times 3 AUG.'93

S'pore Airlines launches direct flights to Hiroshima

By Dominic Nathan in Hiroshima, Japan

SINGAPORE Airlines' network now spans 68 cities in 40 countries, with the launch of its thrice-weekly service to Hiroshima, venue of next year's Asian Games

Despite a weak global economic outlook, intense competition and the strong Singapore dollar, SIA yesterday made Hiroshima its sixth destination in Japan, after Tokyo, Nagoya, Fukuoka, Sendai and Osaka.

Hiroshima City is the capital of Hiroshima Prefecture in the south-west of Japan's main island, Honshu.

SIA now has more destinations in Japan than in any other country except Australia, where it also has six.

The launch of the new service comes a week after the airline announced a 12.4 per cent drop in its after-tax profits to $291.6 million for the six months to September.

Said SIA's deputy managing director (commercial), Mr Michael Tan: "Hiroshima is part of SIA's strategy to bring international services to Japan's fast-emerging region.

"SIA wants to meet the demands from travellers for convenient, direct flights which enable them to bypass growing congestion at the main airports."

He said the direct service takes only six hours — over three hours less than the time needed previously.

"With Hiroshima being the venue for the 12th Asian Games in October next year, the launch of the new service is timely," he said.

SIA's A310-300 service will leave Singapore at 1.35 am every Monday, Wednesday and Saturday, arriving at Hiroshima at 8.45 am the same day.

The return services leave at noon on the same days and arrive in Singapore at 5.30 pm. Japan is an hour ahead of Singapore time.

The launch comes three days after the opening of Hiroshima's new US$710-million ($$1.12 billion) International airport. The airport development and a US$2-billion mass rapid transit system, now under construction, were both planned partly to coincide with the 12th Asian Games.

Hiroshima, where the first atomic bomb was dropped in 1945, is considered a fitting venue for the Games, which have the slogan "Asian Harmony".

Said a Games official: "When the 7,300 participants from 43 countries gather in Hiroshima, the first city to experience the tragedy of an atomic bombing, they will have the opportunity to deepen mutual understanding through sport, and heighten their concern for peace."

As a run-up to the Games, the city is hosting the fourth men's and third women's Asian Cup Hockey tournament.

Singapore's women's hockey team, this year's SEA Games gold medallists, arrived here yesterday on SIA's inaugural flight to take part in the tournament.

New service will help exchange programmes

STUDENT exchange programmes and trade study missions to the Japanese prefecture of Hiroshima will be aided by Singapore Airlines' new direct flights there.

On board yesterday's inaugural flight were some 20 students from the Japanese Studies Department of the National University of Singapore, on a two-week cultural exchange programme.

The students will stay with local families, meet Hiroshima University undergraduates and learn about Japanese working life.

The NUS visit is one of many exchanges promoted by the Hiroshima Representative Office in Singapore (Hiros). The office represents the Hiroshima prefectural government, city governments and chambers of commerce.

Since its establishment in 1991, Hiros has arranged 37 visits for 50 Singaporeans to Hiroshima, and over 800 Japanese visitors to Singapore.

Said Hiros' director, Mr Yasuo Hashimoto: "Our aim is to promote better understanding of each other's culture through business and student exchanges.

"The direct flight makes it more convenient and cheaper for the participants of the exchange programmes to visit Hiroshima and Singapore."

＜直行便就航と交流事業を報じる地元紙＞

配合新聞報社及广岛正运会
广岛促销展
莱佛士城举行

＜ひろしまフェアを報じる中国語紙＞

《シンガポール生活一口メモ》～お風呂とシャワー～

生活スタイルはその風土によって異なります。

年中暑いシンガポールでは，日本のように冬に熱いお風呂に入って体を温めるという必要はありません。

むしろ一年中汗をかきっぱなしで，寝ているときにも汗びっしょりになることから，ゆっくりとお風呂につかるよりも，ひんぱんにシャワーを浴びるほうが向いています。このため，当地の住宅ではシャワーだけでバスタブがないというのも普通です。

～シンガポール便り～

Vol.29

シンガポール広島事務所長
橋本　康男

２年半の蓄積で地元の人たちの間にスムーズに入っていけるようになればなるほど，残り期間が僅かしかなく，これまでの努力の上に生まれた折角の関係を今後に生かしていけないというフラストレーションにとらわれています。

日本でもそうなのでしょうが，海外では特に，信用と力量の蓄積が重要と感じています。仕事を「こなす」「しのぐ」のではなく，積極的に何かを生み出そうとすると，経験の蓄積と意欲に加えて，意識的な努力や勉強が必要なようです。当地でも意欲的な仕事ぶりの人は多く，給与やポストと直接結びつくが故ではあるものの，働きながらのＭＢＡ（経営学修士）の勉強などその努力ぶりには感心します。

■シンガポーリアンとの付き合いと議論■

当地に滞在する日本人でも，組織が大きくそこで働く日本人の数が増えれば増えるほど，また，使えるお金が増えるほど，地元の人たちとの付き合いの度合いが少なくなるようです。幸い当事務所の場合，日本人一人で，頼れる日本の組織もなく，当初は予算も他の自治体事務所に比較して桁違いに少なかったために，いろんな面で地元の人たちに頼らざるを得ず，おかげで付き合いが広がっています。

こちらがお金を出す話であれば，相手も黙って従ってくれるかも知れませんが，相互主義でやろうとすると，信頼がベースになり，手間もかかりますし，相互のメリットについての議論が大切になります。

初対面の議論でも，当地では幹部からフランクでオープンです。この点では，内と外を分け，上と下を考える日本人の方がよほど保守的と感じます。自分自身の会話能力の制約もあり，紙やすりをもって小さな問題点をなくすように磨きたてるよりも，のみや鋸で形を切り出していくような議論が大切と感じています。

当地に来て以来，事務所の信用をかけて，自分の考えと実績を言い訳なしに評価してもらうという環境の中で過ごしてきたために，地元への責任上広島側へはストレートな物の言い方をする習慣がついてしまっており，それが県庁への復帰に障害になるとの助言もいただいていますが，それによって得るものが多かったのも事実であり，当分はこれでいこうかと思っています。

＜インドネシアの地方都市＞

■海外での広島企業人の奮闘■

広島からの企業ミッションに東南アジアの事業環境等を説明する必要上，東南アジア各地の広島関係進出企業等を訪問しています。

その中で感じるのは，海外での事業における「人」の大切さであり，また，魅力的な人が多いことです。

特に，一人又は数人で数多くの地元の人たちと実際に事業を進め，現地の事情に疎い本社を根気強く説得していかなければならないという環境で奮闘されている人たちは，極めて自然に地元の人たちと接しています。それは，「必死になって肩の力を抜く」というものかも知れませんし，「好きにならなければやってられない」という状況なのかも知れません。

いずれにしても，そのような状況の中で，その国を好きになったり嫌いになったりしながらも，結局はその国のことを考えて一生懸命にやっておられます。最近は日本食の材料が手に入り易くなったとはいうものの首都以外の土地ではそうもいかず，医療面の心配も抱えながら，日本レベルの品質を確保しようと，文化・慣習の違いの中で人のつながりを築いていこうと努力されている姿は，「国際化」のモデルと感じます。

＜インドネシアの広島関係企業の工場＞

《シンガポール生活一口メモ》～外食社会～

共働きが多いシンガポールでは，外食が普通です。朝昼夜といつもフードセンター（屋台風食堂街）は賑わっています。１週間のうちに奥さんが夕食をつくるのは数日というのも普通のようです。毎晩習慣的に連れ立って飲み歩くという風習もなく，早く帰宅した夫が家族を連れて食事に出るというのは，日本の女性から見れば羨ましい光景かも知れません。もちろん，個人差はありますが。

この食事で欠かせないのが，「チリ」です。チリというのは，唐辛子のことであり，緑色のチリを酢に漬けてスライスしたものがポピュラーで，日本へ行ったシンガポーリアンが懐かしがるのもこのチリです。

～シンガポール便り～

Vol.30

シンガポール広島事務所長
橋本　康男

この便りももう30号，来月は最終回です。

地元の方々による送別会も始まりだしましたが，まだ今の仕事が終わるということに実感がわきません。短い間でしたが，すっかり気分を変えて没頭しなければならなかっただけに，元の組織に戻るということが，何か不思議な遠い世界のことのように感じられます。

前回の商社での研修のとき以上に復帰後の違和感が大きいと思いますが，この変動の時代に変化や改革から無縁でありうる世界はないでしょうし，県庁も社会の他の構成員とともに同じ土俵でやっていかなければならないのですから，その中で自分の経験を生かしていきたいと考えています。

■多様性の共存■

当地に来て最も印象に残ったことは，多様性の共存とその緊張感ではなかったかと思います。

隣り合う国同士の一人当たりＧＮＰが20倍も違っていたり，一つの国の中でも高い塀とゲートに囲まれた高級住宅地とスラムとが同居していたりという経済的状況の多様性，同じ職場で働く同僚が共通語としての英語以外に民族や出身地によってそれぞれ別の言葉を仲間内で話すというような言語の多様性や宗教の多様性など，様々な意味の多様性が混在しています。色々な状況が同時に存在しており，それが，「昨日と同じ今日，今日と同じ明日」という考え方を拒否し，ダイナミックさを生み出しています。そのような中で人々は，周囲の環境への同化よりも，自分というものの意識，主張，そのための努力へと動くようです。

■公平で明確な共通の評価基準■

多民族の多様性の社会では「融合ではなく共存」が基本原理であり，重要なのは，公平で明確な共通の評価基準であり規範のようです。

シンガポールは罰金国家といわれるほど厳しい規制が多くありますが，これとても多民族の寄り合い所帯としては止むを得ない面があったと思いますし，結果として国民が誇り得るような国づくりが経済的発展を基軸として実現されてきたので，国民もついてきたようです。もっとも，経済的に豊かになるにつれてより自由を求める面もあり，検閲による情報統制への批判も含め，これからの舵取りには困難が予想されます。

学校や職場では，試験の成績や業績など分かりやすい評価基準が重視され，多国籍企業が厳しい評価基準を持ち込んでいます。これについては，学歴主義の弊害もあるように見受けられ，まだまだ過渡期の感はあります。

ただ，救いと感じられるのは，社会のオープン性です。常に世界と接し交流していることから，世間知らずの内弁慶に陥ることなく，不明朗な密室性の歪みというものが少ないように感じます。

<通勤風景：左からインド系，中国系，マレー系>

■ありがとうとあいさつ■

２年半の海外生活にもかかわらず，妻子の英語はあまり上達しませんでした。子供たちについて言えば，朝７時過ぎにスクールバスで学校に行き，夕刻まで日本の学校と全く同じ環境で過ごし（年に数回体長２㍍位のブラックコブラが校庭内に出ることを除いて），週に何度かは塾にいくという生活では，致し方ないかも知れません。

その中での成果は，あいさつができるようになったことです。"Thank You" "Good Morning" などだけは，きちんと言えるようになりました。それが最低限のマナーだからです。折角のこの習慣もあいさつのない日本に帰って急速に失われるという話を聞き，我が家でも同じ道をたどるのではないかと心配しています。

《シンガポールひとくちメモ》~南向きの部屋？~

いくらシンガポールでも太陽は西からは昇りませんが，北には昇ります。北緯１度の赤道直下のこの国では，春分と秋分には太陽が真上に昇り，日本の夏には北に昇ります。

このため，日本的な感覚での「南向きの部屋」という言葉の持つ「望ましいもの」という響きはありません。もっとも，太陽は常に高い位置にあり，また，年平均最高気温30.8℃という常夏の国ゆえ，部屋には日が差し込まないほうが良いのですから，それも当然かも知れません。

<真上からの太陽による影>

～シンガポール便り～
Vol.31

シンガポール広島事務所
橋本　康男

この便りも今回が最終回です。いままでお読みいただいた皆様に、心からお礼を申し上げます。折りにふれ「読んでるよ」と言っていただいたことが、仕事にも本当に励みになりました。

思い上がりや思い込みによる問題もあったかと存じますが、自分なりに必死に取り組んだシンガポールの日々の思いを、できるだけ素直に書いたつもりです。県庁を離れて３年近く、こちらでの仕事に没頭しているつもりでも、やはり、このような世界の変動の中で県庁はこれからどうしていくのだろうと、気になっていたと思います。東南アジアに来てみて、将来へのビジョン・夢と、それを現実のものとしていく実行力の大切さを感じるだけに、古巣への思いは強まりました。

色々失礼な表現は多々あったかと存じますが、なにとぞご容赦いただきたいと思います。

■私にとってのシンガポール■

この３年近くのシンガポールでの経験が、私にとってなんだったのだろうかと考えてみますと、やはりそれは、月並みではありますが、魅力的な人たちとの出会いであっただろうと思います。

地元の人たち、当地で働く日本人、そして日本からの訪問者、みなそれぞれに魅力的な人々が多かったと思います。懸命に夢中になって頑張ることが恥ずかしいことではなく、夢や感性を大切に過ごしていくことが意味のあることだと感じさせられたのは、楽しい経験でした。

それを財産として、次の出会いの際にも恥ずかしくないように、頑張っていきたいと思います。

＜ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙﾎﾟﾘﾃｸﾆｯｸ校副学長らによる送別会＞

■終わりに当たって■

帰国の話を聞いて、少なからぬ人がなぜ今の時期に帰ってしまうのかと言ってくれます。土を耕し種を播き、今やっと若芽が出てきたところではないか。あなたが今の仕事を続けられるようするには、私は誰に手紙を書けば良いのかと。

海外では、言葉の問題、生活習慣・社会常識の問題等により、重力が大きい世界で暮らしているかのように、体が動きにくいものがあります。

しかしながら、人の付き合い、仕事の基本は同じであるように感じます。特にシンガポールの場合、高度な経済成長の達成を背景として、自信とプライドを持った人々と、正面からの議論を通じて、対等な関係で仕事を楽しめたと思います。

広島からの1,100 人の来客の外に当地で名刺交換をした1,200 人の過半数が地元の人々であったことが、私の誇りです。

今、この国を離れるに当たり、いつかまた帰ってこれる日が来ることを願っています。

＜シンガポールの高層ビル街＞

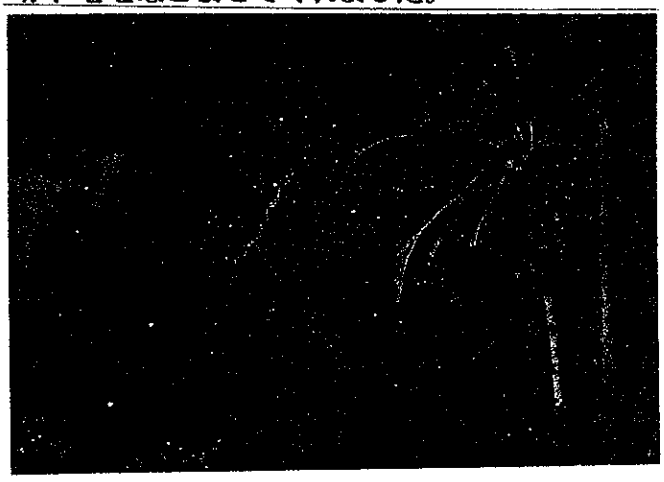
■交流の発展を■

当地では、戦争中の記憶故に日本への不安感は依然ありますが、同時に、高品質な製品を生み出す国としてのあこがれもあります。このため、日本の企業や人々の実際の姿を理解するために広島を訪問したいとの相談が、大学などから持ち込まれます。こうした若い人々を「受け入れる」ことは、私たち自身が周りを見回し、学ぶ機会にもなると思います。双方のために、今後とも多様な交流が大きく広がっていくことを願っています。

《シンガポールひとくちメモ》～南十字星～

シンガポールの思い出の一つは南十字星です。

暑さなどで眠れない夜に、中空に輝く南十字星が、心をなごませてくれました。



＜南十字星、中央上部でやや左に傾いている＞